

日本史

アップデート

「大塩平八郎の乱」は義挙か？

ことに注目

「大塩平八郎の乱」は江戸時代後期、引退与力の大塩平八郎(1793～1837年)が、大坂で町奉行の米不足対策を批判して武装蜂起した事件だ。庶民の救済目的とされる蜂起だが、近年、大塩の個人的な理由との異説が指摘されている。乱による火災被害は大坂市中の

5分の1を焼失するほど甚大だったが、悲惨な事実はいまだに見逃されてきた。一般に大塩の蜂起は「義挙」とされてきたが、江戸時代は被害の大きさから批判も強かった。幕府を倒した明治政府やイデオロギ―論争により、「義挙」の見方が定着したとみられている。

江戸後期、天保の大飢饉のさなか、大坂町奉行所の元役人、大塩平八郎は天保8年(1837年)2月、窮民の救済や幕政の転換を掲げて大坂で武装蜂起した。門弟らと富商宅を焼き、市中に火を放ち、進軍した。「大塩平八郎の乱」は一般に「義挙」とされてきたが、本当にそうなのか。最新の研究では、大塩が批判した米不足対策について、町奉行は妙策を施していた。それどころか、町奉行が大坂の米を江戸に送ったという蜂起の理由は、虚偽だったとの説も出ている。

東日本を中心とした天保の大飢饉は、大坂でも餓死者が相次いだ。だが、大坂の富商らは米を買い占めて暴利を得、町奉行所は幕府の指示で大坂の米を江戸に送っていたと言われる。だが、東北大(日本近世史)によると、江戸に送られた米は、実は、大坂のライバルにあたる兵庫の市場の米だ。逆には、大坂の米を水戸に密輸した疑いがあるという。水戸藩主の側近だった藤田東湖の日記によると、同藩は大坂で買い付けた米を浦賀番所の通行税を支払わず、密輸した。史料「三川雑記」には請負人に大塩の名があり、別の史料にも同様のうわさが記されている。大塩は別の側近、佐藤一斎に心酔していたとされ、関与が事実なら、むしろ大塩は大坂の米不足を助長していたことになる。

大坂市中の5分の1にあたる1万8000軒余が焼失した。当時の大坂の人口約36万人のうち約7万人が焼け出され、少なくとも270人が焼死したとされる。当時の世相を記した書物「浮世の有様」には、「町なかを歩けば必ず餓死者を見るし、道頓堀や日本橋、難波新地あたりには死骸が山と積まれて、犬に喰われている。昼夜とも物もらいの哀れな声が市中にあふれ、乞食が乞食を襲うほどだ。(中略)婦子を抱いて川に投身する者も少なからず」とある。乱後に疫病も流行し、別の文獻には「六月中、千日の墓所にて毎日五、六十人を焼き」とも記されている。

また、「義挙」の看板に隠れがちなのが、被害のすさまじさだ。大塩一派が放った火は3日間燃え続け、大塩らは率先して富商の屋敷に火を付けたため、大坂では乱後に米価が高騰し、前年の倍近くになった。庶民にとって泣きつ面に蜂だったはずだ。愛知淑徳大の荻原大地助教(近世文学)によると、出版統制下に流布した「近世実録」の中には、大塩の乱を「赤眉黄巾の乱の賊に似たり」と中国・漢代の反乱になぞらえ、「癡癡の一旦おこりて乱妨と変化せし」と記したものもあり、大塩の個人的な暴発とみなしている。